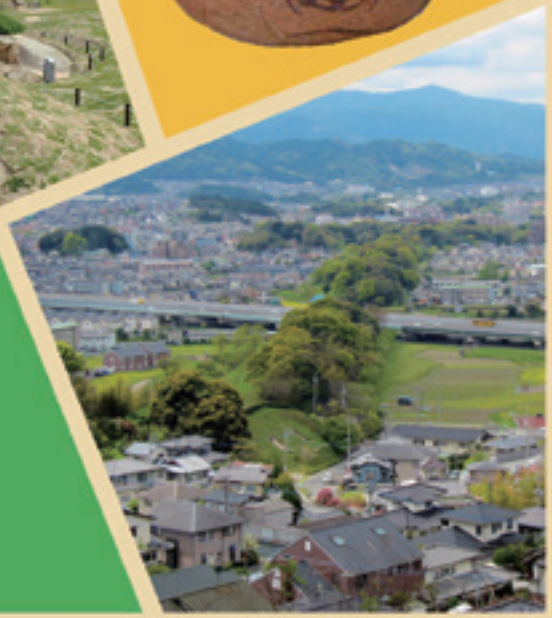
令和３年３月改訂

わたしたちの文化財（ぶんかざい）



大野城市教育委員会

もくじ

日本遺産「古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～」…1
1 水城跡……3
2 大野城跡……4
3 牛頸須恵器窯跡……5
4 梅頭窯跡……6
5 小田浦窯跡群（79地点）……7
6 牛頸須恵器窯跡出土ヘラ書き須恵器……8
7 善一田古墳群……9
8 竹田家所蔵文書……11
9 木造聖観音立像……12
10 筒井の井戸……13
11 博多独楽……14
12 仲島遺跡……15
13 人面墨書土器……15
14 貨布……16
15 移動式竈……17
16 三角縁神獣鏡……18
17 新羅土器……19
18 王城山古墳群……20
19 雉子ヶ尾古墳群……20
20 上大利老松神社門礎（唐居敷）……21
21 古野遺跡経筒……22
22 道標石……23
23 郡境界標……24
24 溜井之碑……25
25 髙原家文書……26
26 染原家文書……26
27 絵馬（夏越し祓い祇園踊りの絵馬）……27
28 薬師の杜……28
29 御笠の森……29
30 センダンの木……31
31 中・寺尾遺跡……32
32 森園遺跡……33
33 中通遺跡群……34
34 胴ノ元古墳……35
35 唐山城跡……36
36 不動城跡……37
37 猿田彦大神……38
38 享保子丑餓死枯骨塔……39
39 春日原停留所・運動場道の碑……40
40 牛頸小学校跡の碑……41
41 宮添井堰の碑……42
42 天狗の鞍掛けの松の碑……43
43 平野神社……44
44 新川跡……45
45 大野村消防組第二格納庫……46
大野城市文化財ＭＡＰ……47

大野城跡
水城跡

日本遺産「古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～」

日本遺産とは

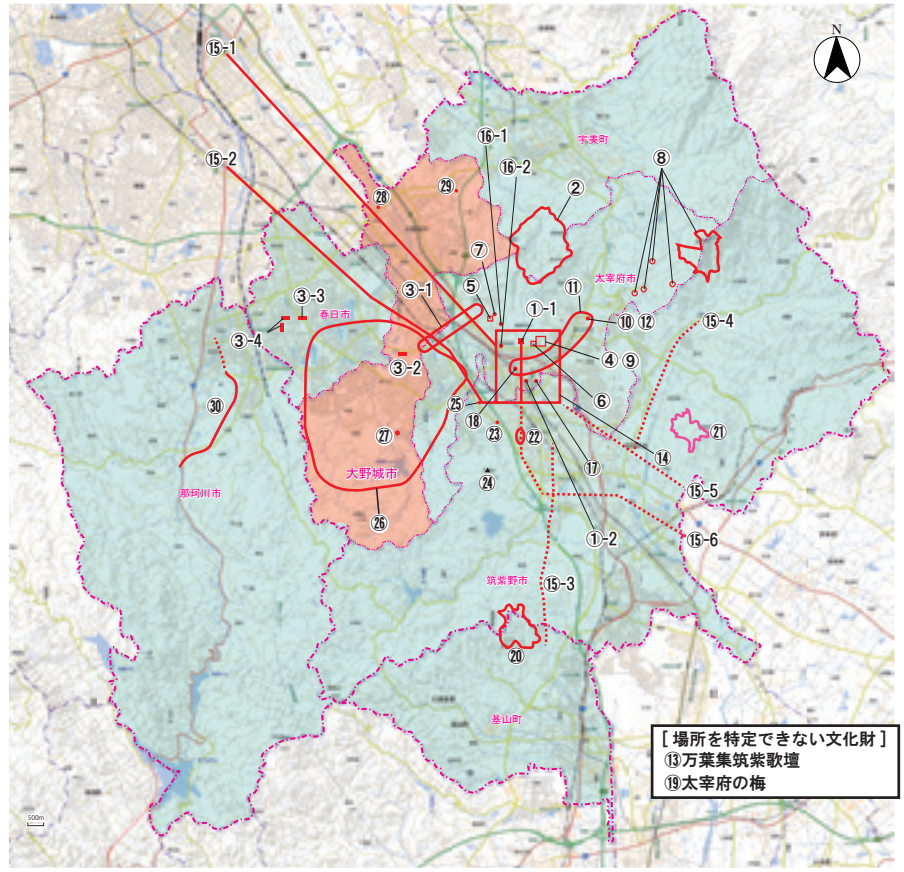
日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するもので、全国で 104 件が認定されている（令和３年２月現在）。

日本遺産「古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～」は、平成 27 年に太宰府市が認定を受けたもので、令和２年に拡充され、大野城市、筑紫野市、春日市、那珂川市、宇美町、佐賀県基山町までその範囲が広がった。計 30 件の構成文化財でストーリーが成り立っており、このうち６件の構成文化財（水城跡、大野城跡、牛頸須恵器窯跡、牛頸須恵器窯跡出土ヘラ書き須恵器、善一田古墳群、御笠の森）が大野城市内に所在する。

ストーリーの概要

大宰府政庁を中心としたこの地域は、東アジアからの文化、宗教、政治、人などが流入・集積するのみならず、古代日本にとって東アジアとの外交、軍事拠点でもあり、軍事施設や都市機能を建設するのに地の利を活かした理想の場所であった。現在においても大宰府跡とその周辺景観は当時の面影を残し、宗教施設、迎賓施設、直線的な道や碁盤目の地割跡は、1300 年前の古代国際都市「西の都」を現代において体感できる場所である。

▼日本遺産「古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～」構成文化財位置図



①-1大宰府跡［政庁］
①-2大宰府跡［客館］
②大野城跡
③-1水城跡（水城大堤）
③-2水城跡（上大利小水城）
③-3水城跡（大土居小水城）
③-4水城跡（天神山小水城）
④観世音寺・戒壇院
⑤筑前国分寺跡
⑥大宰府学校院跡
⑦国分瓦窯跡
⑧宝満山
⑨梵鐘
⑩太宰府天満宮
⑪太宰府天満宮神幸行事
⑫太宰府天満宮の伝統行事
⑭大宰府条坊跡
⑮-1官道［水城東門ルート］
⑮-2官道［水城西門ルート］
⑮-3官道［城の山道］
⑮-4官道［豊前道］
⑮-5官道［豊後道（北路）］
⑮-6官道［豊後道（南路）］
⑯-1軍団印出土地［御笠団印］
⑯-2軍団印出土地［遠賀団印］
⑰般若寺跡
⑱南館跡（榎社）
⑳基肄城跡
㉑阿志岐山城跡（二日市温泉）
㉒次田温泉
㉓塔原塔跡（塔原廃寺）
㉔天拝山
㉕杉塚廃寺
㉖牛頸須恵器窯跡
㉗牛頸須恵器窯跡出土ヘラ書き須恵器
㉘御笠の森
㉙善一田古墳群
㉚裂田溝

1 水城跡　国指定特別史跡

『日本書紀』によれば天智３（664）年の条に「筑紫に、大堤を築きて水を貯へしむ。名けて水城と曰ふ。」と記述されている長大な土塁である。長さ1.2km、基底部幅80ｍ、高さ９～14ｍで、福岡平野から筑紫平野へ通じる最も狭まったところに造られている。その西側には、小さな谷部を遮断するようにいくつかの小水城が築かれている。

西暦660年、朝鮮半島の国のひとつ「百済」が、隣国の「新羅」と中国「唐」によって滅ぼされた。復興を目指す百済の遺臣は友好関係にあったわが国「倭」に救いを求めてきた。そのため斉明天皇自ら九州に赴き、朝鮮半島に援軍を送った。斉明天皇の死後は中大兄皇子が陣頭指揮をとったが、天智２（663）年に「唐」と「新羅」の連合軍によって白村江で大敗してしまう。

敗北した「倭」は連合軍が攻め込んでくることを恐れ、当時、九州にあった「那津官家」という外交の玄関口で九州支配の拠点であった出先機関を現在の大宰府政庁の場所へ移し、この防衛のために664年に水城を築造した。

昭和50（1975）年の調査によって土塁前面の博多湾側に幅60ｍ、深さ４ｍ前後の濠があることがわかった。この濠に通水する木樋は幅1.5ｍ、深さ0.7ｍで、全長は80ｍあり、版築工法で築かれた土塁の下に設置されていた。また、東西の丘陵との取り付き部近くには門が設置されており、それぞれ水城東門・西門と呼ばれている。

現在では九州縦貫自動車道・国道３号線、西鉄天神大牟田線、ＪＲ鹿児島本線により、３つに分断されている。

2 大野城跡　国指定特別史跡

大野城は水城が築造された翌年に築かれた日本最古の朝鮮式山城である。『日本書紀』によれば天智４（665）年８月「達率憶禮福留、達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽、二城を築かしむ。」とある。達率とは百済の官位であり、この２名は白村江の戦いで敗退した際に倭の船に乗り込んだ亡命官人である。

大野城には、大城山山頂一帯に版築工法を用いた土塁と、谷部には石塁が築かれている。その総延長は約8.6kmにわたり北・南側は二重に取り巻いている。石塁の長大なものは特に「百間石垣」や「大石垣」などと呼ばれている。

城門は９箇所見つかっている。最も荘厳な構えは太宰府口城門である。また、北石垣城門では日本初となる鉄製の軸受金具が出土した。土塁・石塁の内側には８群約70棟の建物が確認されている。現在は礎石を残すのみであるが、食料や武器などを納めた倉庫の役目を持っていたと考えられ、焼米ケ原では炭化した米を拾うことができる。また、内部構造として井戸なども確認されている。

大野城の役割は、敵が水城を越えて侵入してきた場合に、大宰府政庁やその周辺の人々が逃げ込むための城であったと考えられる。しかしながら、唐・新羅の連合軍が攻めてくることはなく、この城が軍事目的に使用されることはなかった。宝亀５（774）年に大城山に四王院が建立されたことから現在は四王寺山という名称で親しまれ、宗教的信仰の対象ともなっている。

3 牛頸須恵器窯跡　国指定史跡

大野城市では、古墳時代から平安時代にかけての須恵器（灰色をした硬質の土器）の窯跡がたくさん見つかっている。特に牛頸に数多く造られ、その一群を牛頸窯跡群と呼んでいる。牛頸窯跡群は牛頸、上大利や春日市、太宰府市の一部を含む東西４km、南北 4.8km の範囲に広がっていて、現在までに約 300 基の窯が調査されているが、総数は 600 基にせまると推定される。その規模は兵庫県以西の西日本最大とされ、平成 21(2009) 年２月 21 日に牛頸須恵器窯跡という名称で牛頸窯跡群の一部が国の史跡に指定された。

牛頸窯跡群では６世紀の中ごろから須恵器の生産がはじまった。窯は谷に面した丘陵の斜面に地下式窖窯を造ったもので、焚口、燃焼部、焼成部、奥壁、煙り出しから構成され、焚口の前面には灰原が広がっている。焼成時の温度は 1100 度以上と非常に高温になるため、須恵器は大変硬く仕上がる特徴がある。また、窯の温度が高温になった段階で酸素の供給口を閉じてしまうことから灰色になる。

▲牛頸平田窯跡Ｄ地点（発掘調査終了後消滅）

4 梅頭窯跡　国指定史跡

梅頭窯跡は国指定史跡牛頸須恵器窯跡に含まれ、上大利の三兼池公園に保存されている。窯跡の全長は約 11.5m と大きく、時期は６世紀末から７世紀ごろと考えられる。この窯で最も注目されるのは、窯内から大きな石が見つかり、その石の周辺から鉄刀・鉄鏃・須恵器などが出土したことである。須恵器の中には、ベンガラという赤い色の顔料をいれたものもあった。これらの遺物の組み合わせは古墳などに見られるものであることから、窯の操業終了後に墓として転用したと考えられる。このような事例が発見されたのは全国でも初めてである。

覆屋は保存と公開のため平成 16(2004) 年３月に建設された。

◀覆屋全景

遺物出土状況▶

5 小田浦窯跡群（79 地点）　国指定史跡

この窯跡は月の浦４丁目と平野台４丁目の住宅街に挟まれた山の斜面にあり、国指定史跡牛頸須恵器窯跡の一角を占める。古墳時代の終わり頃から飛鳥時代の窯跡が５基並ぶように見つかった。３号窯は長さ 11.7 m、幅 2.3 m と規模が大きく、煙を出す部分は「多孔式煙道」と呼ばれる構造であった。多孔式煙道とは、一般的な窯跡が一つの大きな煙突（煙道）を持つのに対し、いくつもの小型の煙突を持つものをいう。火を焚くとき、小型の煙突を開けたり閉めたりすることによって窯の中の温度調整をしていたものと考えられ、牛頸須恵器窯跡特有の窯の構造といえる。また、窯の一つからは須恵器に混じって、たくさんの瓦が見つかった。当時は日本で瓦を生産し始めて間もない頃で、一部のお寺や役所のような非常に限られた場所でしか使用されていなかった。九州では、那津官家の跡と考えられる那珂・比恵遺跡群から出土しており、外交使節を迎える建物の屋根を飾っていたと考えられる。

◀窯跡の全景

6 牛頸須恵器窯跡出土ヘラ書き須恵器　県指定有形文化財

牛頸ハセムシ窯跡群から文字の刻まれた奈良時代の須恵器甕片が 10 片ほど見つかった。ヘラ書き須恵器とは土器焼成前の生乾きの状態にヘラ状の道具で文字を記した須恵器のことを指す。

須恵器には「筑 紫 前 國 奈珂郡　手東里大神部得身　□□　□ 并三人　調大瑪一隻和銅六年」「大 神 君百江　大神部麻呂　内椋人万呂 并三人　奉　□瑪一隻和銅六年」と刻まれている。和銅六（713）年に筑前国那珂郡手東里の大神君ら三人の人物が、調として大甕を一つ納めたという記録である。調とは 17 歳以上の男子に課せられた税の一つで、絹・糸・真綿や地方の特産物を納めなければならないものである。ハセムシ窯跡群で見つかった調という文字から、『延喜式』という古代の文献に記載されていた内容と一致することがわかった。

記録の体裁は平城京出土の木簡と同じで、当時の税の様子を知る上で大変貴重である。また、古代史の研究ではヘラ書きは筆順を容易に知ることができ、筆者の文字の習得程度がわかることから、当時の識字率や文字の普及状態を明らかにする上で重要な資料である。

◀和銅六年銘ヘラ書き須恵器

7 善一田古墳群　県指定史跡

善一田古墳群は、市域東部の乙金山の麓（乙金東１丁目）に所在する。総数 30 基ほどの古墳が見つかっており、6 世紀後半～ 7 世紀後半（いまから約 1400 年ほど前）までの約 100 年間に造られた。乙金地区周辺で活動していた鉄器生産集団や朝鮮半島と盛んに交流していた人々が埋葬されたと考えられる。

大半の古墳は直径 10 ～ 15 m程度の小さなもので、様々なアクセサリーや装飾がある刀といった副葬品が出土した。最大規模の 18 号墳は直径 25 mほどの円墳で、古墳内部には遺体を埋葬する施設である巨大な石室がある。馬具や弓矢などの豊富な副葬品の存在から、この地域一帯を治めたリーダーの古墳と考えられる。

善一田古墳群はその重要性から一部を現地で保存し、公園として整備しており、いつでも古墳時代の雰囲気を体感することができる。

▲善一田古墳公園

▲ 26 号墳副葬品

▲ 18 号墳副葬品

▲ 18 号墳石室内部

8 竹田家所蔵文書　県指定有形文化財

指定を受けているのは巻子（巻物）８巻、『筑前国続風土記』、『黒田家譜』各一揃である。巻子８巻には次のようなものが収められている。『貝原益軒先生筆蹟』全２巻に収られる益軒の書簡 17 通は、故伊東四郎氏の整理になる代表的なものであり、竹田家の先祖定直と筑前福岡藩の儒学者で師匠であった益軒との師弟関係を知る上での貴重な資料である。また、『竹田家代々之筆蹟』の１巻には定直以来代々竹田家の人々の筆蹟、『他来諸名家之筆蹟』４巻には定直と交わりのあった儒学者荻生徂徠や菅茶山などの著名な人の文書・筆蹟など、竹田家９代目定猗が長崎に遊学したときに師事、あるいは親交があった中国の諸学者の筆蹟を収めた『清朝人士之筆蹟』の１巻などがある。

益軒の高弟であった竹田定直は益軒のもとで『筑前国続風土記』『黒田家譜』の編集に携わり、益軒の著述に最も助力した人と言われている。また牛頸においては笛塾を開き、子弟の教育にあたった。

▲竹田家所蔵文書巻子

9 木造聖観音立像　県指定有形文化財

この像は雑餉隈町にあるお堂の中に祀られている。全高 100.5cm、像高 59.5cm、台座高 30.5cm の像である。

像の胎内は「大仏所発心武蔵花押応永廿一年八月日　むまのとし」の墨書銘があり、応永 21（1414）年室町時代の作であることがわかる。

この像は、檜の寄木造で、頭に透かし彫りの宝冠をつけ、白毫（仏像の眉間にある毛）、水晶をはめ込んだ玉眼、左手には未開蓮華を持っている。目元、口元のおだやかな丸みのある線は、典型的な室町時代の様式を感じさせる。また納衣を着け、通肩（両肩を納衣でおおう着方）の姿の聖観音立像は県内では他に例を見ず、大変珍しいものである。

毎年７月 17 日には子どもたちが夏わずらいをしないで元気に過ごせるようにと願って「六月堂」という祭りが行われていたが、現在は地域の夏祭りと恵比須神社の「千灯明」というお祭りと一緒に８月に行われている。

また、「六月堂」の起源ともなった「鎮西上人の安産祈願」という伝説が残されており、現在でも元気な子どもが産まれるよう、妊婦がお参りをする姿を見ることができる。

10 筒井の井戸　　県指定有形民俗文化財

江戸時代に編纂された『筑前国続風土記』（貝原益軒著）に「雑餉隈より南に近き村也。村中に筒井とて清水あり。木の筒を以て井韓とす。此故に村の名をも筒井と云也。其水極めて清冽にして、大旱といへとも涸す。常に筒の上に湧上る。只冬至の夜許水出すと云。」と記されている。

『筑前国続風土記』には「木の筒の井戸枠」と書かれているが、現在の井戸枠は花崗岩をくり抜いたもので、高さ約 80cm の枠が２段に積んである。これらの井戸枠の作られた年代は不詳である。

この種の井戸は全国で数箇所発見されているが、大野城市の筒井の井戸は形、大きさ、美しさの点で、もっとも優れたものであるといわれている。昭和 50 年代前半までは清水が勢いよく湧き出ていたが、50 年代後半頃からその量が少なくなり、今では井戸枠の縁から 30cm ほど下までしか水がたまらなくなってしまった。

▲現在の筒井の井戸

11 博多独楽　　県指定無形文化財

博多独楽は、博多が発祥と伝えられる曲独楽である。日本における独楽の歴史は白鳳時代まで遡るとされるが、曲独楽として発展したのは江戸時代に入ってからといわれる。このころ曲独楽は大流行したが、明治時代には人気に陰りが見え始め、昭和に入ると舞台興行としての曲独楽を見ることはほとんどなくなった。

その中で、「天神流曲独楽」を名乗り博多に住んでいた三谷柳水は、初代筑紫珠楽に曲独楽を伝承した。初代筑紫珠楽は、それまで主流であった座って行う芸だけでなく、立って行う芸も取り入れ、さらに曲独楽についての研究を行うなど、現在の博多独楽の発展に尽力し、昭和 33（1958）年に福岡県無形文化財に指定された。

その後、二代目・三代目筑紫珠楽によって技や芸が伝えられ、平成 26（2014）年に二代目筑紫珠楽が福岡県無形文化財に指定された。

現在は、扇子の上で独楽を操る「末広」、独楽が糸を渡る「大黒」、板の上の五つの独楽を操る「五彩」、独楽が刀の刃を渡る「飛梅」など十六種の芸が伝えられている。

◀ 二代目筑紫珠楽の「末広」

12 仲島遺跡

仲畑地区と福岡市博多区井相田にまたがる弥生・古墳・奈良時代の集落遺跡である。昭和54(1979)年度から発掘調査が行われている。この遺跡から弥生土器・土師器・須恵器・木器などの日常生活用具、弥生時代の石器などが出土した。昭和55(1980)年度の調査では人面墨書土器、昭和56(1981)年度には貨布、平成元(1989)年度には移動式竈が出土した。

13 人面墨書土器　市指定有形文化財

仲島遺跡の東端部、御笠川の氾濫原の砂の中から３点出土した。人面墨書土器は、奈良時代から平安時代初めにかけて見られる宗教的な儀式に使用されたと考えられる土器で、最も多く出土するのは奈良時代の都である平城京であるが、九州では仲島遺跡以外には、佐賀市と太宰府市・福岡市の出土例が知られているくらいである。疫病神を思わせる人面が墨で描かれ、底部には穴が開けられている。病気になった人が土器に息を吹き込み、川や溝に流して災いから身を守ったと考えられ、出土場所も川や溝の中といった水辺が多い。

人面墨書土器▶

14 貨布　市指定有形文化財

▲貨布（左に布、右に貨の文字）

貨布は中国「新」の時代に発行された青銅製貨幣で、長さ約5.8cm、最大幅2.3cmである。古代の農工具のひとつである鋤の形を現したもので、片面に篆書体で「貨」（右）と「布」（左）の文字を鋳出しているため貨布と呼ばれている。発掘調査での出土は大野城市の１例だけである。

前漢末期の西暦８年、皇帝の親類に当る王莽は皇帝を暗殺し、天下の実権を奪い取り、国名を「新」と変え、元号も始建国と改めた。王莽は様々な経済改革を行ったが、その一つに新貨幣の発行がある。貨布・貨泉・大泉五十・小泉直一など全部で30種近くもの貨幣を発行した。これらをまとめて王莽銭という。王莽の政策は古代国家を理想とした非現実的なもので、社会経済を混乱に陥れることになった。このため各地で反乱が起こり、西暦23年には王莽の「新」は滅んだ。

仲島遺跡からは、この他にも青銅製鋤先や銅鏡片などが見つかっていることから、一般的な集落ではない、権力を持った人々が存在する集落であったと考えられる。

15 移動式竈　市指定有形文化財

古墳時代後半になると、それまでの竪穴住居の中心に作られた簡単な炉から、壁に竈を取り付けたものが現れるようになる。住居に作り付けて動かすことができない竈を、持ち運びできるようにしたものが移動式の竈である。土師質の素焼きの竈で、両側に取っ手を付けている。前面は薪をくべるために大きな窓が開けられ、その上には火をよけるための庇を取り付けている。上部には煮炊きの土器を置くためのまるい穴を開けている。

仲島遺跡から出土した移動式竈は、古墳時代後期の大きな溝から出土した。高さは約 25cm、裾幅は約 50cm である。内側には黒い煤が付着しているが、下のほうにはついておらずその部分を土中に埋めて固定していたのではないかと考えられる。断片的なものはしばしば出土するが、このように完全な形がわかるものは極めて珍しい。

16 三角縁神獣鏡　市指定有形文化財

古墳時代前期を代表する鏡で、鏡の縁の断面が三角形で、表面には神と獣が浮き彫りにされている。江戸時代に現在の御陵中学校の近くにあった赤坂山から出土したという記録のある鏡で、御陵古墳群から見つかったと考えられる。鏡の直径は 22cm であるが、現在８片に分かれており、足りない部分もある。

御陵古墳群は福岡平野と粕屋平野を結ぶルートを見下ろす位置にあり、交通の要衝に位置している。御陵古墳を造った勢力はその重要性をヤマト政権から認められ、先進的な文化を古墳時代を通じて積極的に受け入れたと考えられる。

三角縁神獣鏡は現在全国で 500 面以上が見つかっており、文様を細かく分析することで中国製と日本製に分けられる。このようにたくさんの鏡が見つかっているのに、製作工房や鏡の鋳型などは発見されておらず、製作地については議論が続いている。

17 新羅土器

７世紀の朝鮮半島は、高句麗・百済・新羅が覇を競う三国時代であった。これら三国のうち、新羅（現在の慶州が中心地）で作られた土器を新羅土器と呼び、特に７世紀代ではヘラやスタンプにより三角文や円文で土器を飾ることが特徴である。

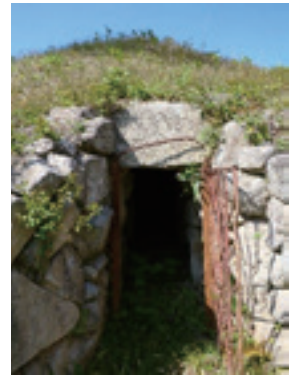
市内では、乙金地区の王城山古墳群・善一田古墳群・唐山古墳群などで出土し、日本で最も新羅土器の集中する地域の一つである。いずれも６世紀末～７世紀後半のもので、乙金地区と新羅との積極的な交流を物語る。

なお、乙金地区に近接する大野城跡は、『日本書紀』には天智４(665)年に百済高官の指揮により築造した、と記す。新羅との緊張関係が続く中、大野城のお膝元にある乙金地区に新羅土器が集中する背景は未解明であるが、非常に興味深い。

▲乙金地区で発見された新羅土器

▲新羅土器の文様

18 王城山古墳群



王城山古墳群は、市域東部の乙金山の麓（乙金２丁目）に所在し、善一田古墳群の南に位置する。総数 40 基ほどの古墳が見つかっており、6 世紀後半～７世紀後半(いまから約 1400 年ほど前）までの約 100 年間に造られた。最大の特徴は、当時（７世紀頃）の朝鮮半島にあった国の一つである新羅で作られた「新羅土器」が多数見つかっていることである。国内でも屈指の新羅土器集中地帯であり、新羅との活発な交流をしていた人々の古墳群である。

19 雉子ヶ尾古墳群

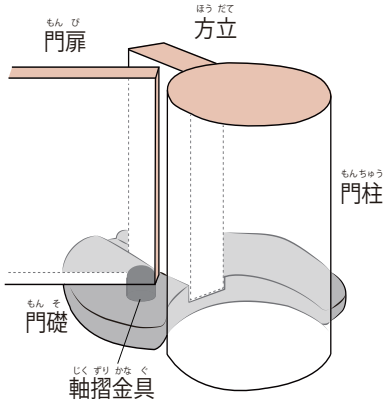
雉子ヶ尾古墳群は、四王寺山の麓（大城２丁目）に所在し、王城山古墳群から南へ１㎞の地点に位置する。７基ほどの古墳が見つかっているが、このうち１基が現地で保存されている。古墳内部の埋葬施設は、巨石を使用した横穴式石室で、当地域の７世紀の古墳の典型的な事例である。

20 上大利老松神社門礎（唐居敷） 市指定有形文化財

上大利３丁目にある上大利老松神社には、特別史跡水城跡や大野城跡が造られたころの古代城門礎石がある。礎石は神社の拝殿に向かって右側にあり、大きな花崗岩の側面を半円状に刳り込み、表面には長方形の穴（方立穴）と、円形の穴（門扉軸受穴）を彫りこんでいる。

古代城門の門礎石には穴を掘って柱を立てる掘立柱形式のものと、礎石の上に立てる礎石形式のものがあるが、この礎石は半円形の刳り込みがあることから、掘立柱形式の門であると考えられる。刳り込みの大きさから、門の柱は直径 60cm くらいあったと推定される。

この門礎石がいつ、どこから神社に持ち込まれたのか詳しいことは分かっていないが、神社からおよそ 700 mの所には水城西門跡や上大利小水城跡がある。古代に城門が作られ、礎石が据えられたのはこうした防衛施設であった所であり、今後、調査していく必要がある。



▲上大利老松神社門礎（手前）

◀掘立柱形式の門（イメージ図）

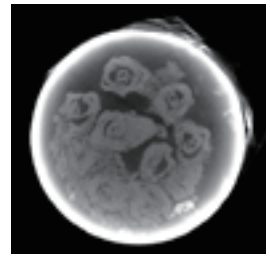
21 古野遺跡経筒 市指定有形文化財

古野遺跡は乙金宝満神社周辺に広がる遺跡である。見晴らしの良い丘の上で経塚が見つかり、内部から経筒が出土した。

経塚とは仏教の経典を土の中に納めた場所のことで、本来的には末法の世（お釈迦様の死後、仏の教えが伝わらなくなる時代）に仏教の教えを残すことを目的とするが、実際は様々な願いを込めて作られたものと考えられている。経筒とは経巻（お経を書いた巻物）を納めるための容器である。古野遺跡経筒は高さ 25cm、直径 10cm の青銅製で、筒の底にはトンボや草花を表現した鏡をはめ込んでいる。経筒内部を X 線 CT スキャナで調べたところ、10 巻の巻物が納められていることが判明した。経筒の年代は 12 世紀前半（平安時代の終わりごろ）で、乙金地区で開発が進展していく時代にあたり、開発の成功を願ったり、土地の神様を鎮める目的で造営された可能性がある。

▲経筒

▲底面の鏡



▲経筒内部の X 線写真

◀古野遺跡の経塚

22 道標石　市指定有形民俗文化財

釜蓋区の古い集落のはずれにある道しるべである。自然石を台座にした角形の石柱で、正面には「從是左うみミち右やまえ□」、左側面には「施主加満ふた衆」、右側面には「延享元年子ノ八月吉日」と刻まれている。延享元（1744）年、地元の人によって建てられ大切にされてきた道しるべで、両脇にはいつのころからか２体の仏像が据えられている。

道標石は、本来田中道に面していたと思われる。田中道とは大野城市域を通る近世の主要な道路の一つで、名前の由来としては筑後領主田中吉政と交流のあった福岡藩黒田長政が吉政の江戸参勤や下向のために整備した道など諸説ある。

▲写真中央が道標石

23 郡境界標　市指定有形民俗文化財

県道 112 号線の雑餉隈町と錦町の境に建っていた高さ 117cm の角形の石柱である。

この道標は、当時の御笠郡と那珂郡との境界を明示するものであった。江戸時代の大野城市は御笠郡に含まれており、春日市や那珂川市、福岡市の中央区、南区などは那珂郡であった。日田街道沿いに建っていた道標の東側面には「從是東御笠郡、西那珂郡」、西側面には「文化丁丑歳四月」、南側面には「筒井村抱」、北側面には「井相田村抱」と刻まれている。文化丁丑歳は、文化 14（1817）年にあたる。

このような郡境界標が現存するものは少なく、貴重な文化財である。風化や破損が懸念されたため、現在は大野城心のふるさと館に移設されており、跡地には記念碑が建っている。

▲表面

▲裏面

24 溜井之碑　市指定有形文化財

上大利の三兼池に建つ石碑である。明治10年に白木原村・上大利村・春日村とともに巨額の私費を投じて牛頸から用水路を完成させた森山庄太の功績をたたえて建てられた。

田畑を潤すための水を確保することができなかった白木原・上大利・春日村は、弘化年間（1844～1848年）から大庄屋髙原美徳と白木原村庄屋森山庄平の発案で牛頸から水を引く工事を開始した。しかし、福岡藩の改革によって途中で工事を断念しなければならなかった。その後、明治10(1877)年に森山庄平の息子である白木原村戸長森山庄太によって工事が再開され、牛頸川の北田井堰より取水し、猫池・伊賀井牟田池・船頭ヶ浦池（上池・中池）・日の浦池を通り、三兼池・池頭池（春日市）まで水路とトンネルで結ぶ用水路を完成させた。

この用水路の完成によって、三村の田畑は旱魃のときでも水が枯れることはなく、豊かな実りを得ることができた。

▲三兼池横に建つ溜井之碑

25 髙原家文書　市指定有形文化財

本市東部の乙金地区髙原家に伝えられた近世から近現代の文書類である。髙原家は江戸時代は代々庄屋や大庄屋を務め、明治時代には大野村村長を務めた旧家であるが、分家により現在は3軒に分かれて保存されている。文書の内容は庄屋を務めていた関係上、農村・農業関係の資料が多く、明治時代の村役場経費、利水や山関係資料、日露戦争時の婦人会資料等に貴重なものがある。また幕末、尊皇攘夷派公卿の三条実美ら七卿が政治状況の悪化により長州（山口県）に下ったが、このうちの五卿が太宰府に滞在した。彼らは髙原家とも交流があり、それらに関する資料も貴重である。

26 染原家文書　市指定有形文化財

本市北部の仲畑（旧大字名畑詰）にある染原家に残された139点の文書類である。染原家は代々庄屋や大庄屋を務めた旧家で、その関係から村政に関する資料が多く、『大野城市史』にも多く収録されている。最も古いものは正保2（1645）年のものであるが、特に文化元（1804）年から天保10（1839）年までの日記である「染原卯助嫡同卯平中年迄之記録」には、畑詰村だけではなく、広く御笠川流域に住む人々が自然災害を被りながらも自然と懸命にたたかって農業を営む姿が記録されており重要である。また、幕末に藩命により農民を引率して霞ヶ関まで出張した時の記録も貴重である。

27 絵馬（夏越し祓い祇園踊りの絵馬）　市指定有形民俗文化財

乙金宝満神社の拝殿に掲げられていた絵馬である。この絵馬は市内の神社に奉納してある絵馬の中で最も古く、江戸時代後期の天保２（1831）年博多の町絵師、村田東圃によって描かれたものである。

11 人の男女が手に手に扇を持ち、輪になり右回りに踊っている姿が描かれている。その身のこなし、表情から踊っている人物の生き生きとした楽しそうな様子、さざめきまでもが伝わってきそうである。

額は檜製で縦 117cm、横 188cm と大きく「天保二辛卯六月十日産子中」「應需東圃寫□」（もとめに応じて東圃〈これを〉写す）の紀年銘がある。この絵馬は風俗画として当時の習俗、また服装、髪型などを知る上でも貴重な資料であり、現在は大野城心のふるさと館に収蔵されている。

古代から６月と 12 月は半年分のけがれを祓い浄め、その後半年の無事を祈る「祓え」といわれる神事がとりおこなわれてきた。旧暦６月 30 日に行われる祓えを「夏越し祓い」といい、夏には災害が多く、疫病も流行ったため茅の輪くぐりや人形流しの祓えをして乗り切っていた。

28 薬師の杜　市指定天然記念物

畑の中にある鎮守の森で、薬師堂の境内となっている。エノキ・クスノキ・タブノキ・ヤブニッケイ・クロキ・ヤブツバキなどから構成されている。特にエノキは最大級に成長したものである。またエノキにはキヅタが登っていて、独特な雰囲気を出している。

この薬師堂に祀られているお薬師様は目の神様としてあがめられている。

薬師の杜全景▶

◀薬師堂

29 御笠の森　市指定有形民俗文化財・天然記念物

県道那珂川・宇美線（県道 60 号線）に面した山田２丁目に森があり、昔から「御笠の森」と呼ばれている。奈良時代に記された『日本書紀』神功皇后の条に「戊子に、皇后、熊鷲を撃たむと欲して、橿日宮（福岡市東区香椎）より松峡宮（朝倉郡筑前町）に遷りたまふ。時に、飄風忽ちに起りて、御笠墮風されぬ。故、時人、其の處を号けて御笠と曰う。」とあり、筑前国御笠郡や御笠川などの地名はこの故事による。

また、江戸時代に編纂された『筑前国続風土記』や言い伝えには「武内宿禰以下大勢の軍兵を率いて、橿日宮から大野に出られ、宝満山から流れ出て博多湾にそそぐ川（御笠川）のほとりを荷持田（朝倉市秋月字野鳥）を目指して南へ向かわれた神功皇后が、大野城市の筒井の辺りまで進まれたときに、いたずらなつむじ風が皇后の笠を奪ってしまった。そこで、土地の人たちは、笠がぬげたところに「笠抜ぎ」という地名をつけた」とある。

現在は住居表示により旧字名は廃止されているが、大野城市大字上筒井小字笠抜の地名は、こうして起こったといわれている。

また、「皇后の笠が吹き飛ばされたのにびっくりしたお供の人たちは、急いでその笠を追いかけたが、空高く舞い上がった笠は風に乗ってくるくる回りながら北へ北へと飛んでいって、１km 程離れた山田の森の、大きな楠の木のこずえにかかってしまった。やっと森までたどりついたお供の人たちは、さっそくこの笠を取ろうとするが、高いこずえに笠の紐が巻き付いて、どうしても取ることができずに大変

困っていた。そのさわぎを見つけて村の人たちも集まってきた。事情を聞いた村長は森の神様にお願いして取っていただくしか方法がないと思い、お供の人たちと相談して、森の前の田んぼのなかで神様に奉納する舞を始めた。するとどうでしょう。枝にからまっていた笠の紐は、ひとりでにするするととけて、笠はひらひらと舞を舞っている人の上に、降りてきた。大変喜んだ村人たちは、そこを「舞田」と呼ぶようになった。」という伝説が残っている。

現在御笠の森には神功皇后祠があり、また、大宰大監大伴宿禰百代が詠んだ歌「念はぬを思ふといはば大野なる御笠の森の神し知らさむ」が刻まれた万葉歌碑が建っている。

◀御笠の森全景

▲神功皇后祠

▲万葉歌碑

30 センダンの木　市指定天然記念物

大野小学校のシンボルであるセンダンの木は、大正３(1912) 年旌表旗受賞を記念して大野城市牛頸の山中から移植された。植樹当日は牛頸小学校の子どもたちも参加するほどの大掛かりな事業であった。当時は、運動場と民家の境に植えられたが、度重なる校庭の拡張工事によって、現在のように運動場のほぼ中心に位置するようになった。センダンの木は、センダン科の樹木で熱帯アジアに広く分布している落葉の高木である。日本では、九州や四国でよく見かける木で、初夏には、小さな紫色の花が房状に咲き、秋には１cm 余りの黄色い実をつける。大野小学校のセンダンの木は、幹周りが約４m、樹齢は 110 年から 120 年と推定される。このような大木を見かけるのは、市内はもとより、周辺地域を含めて稀である。センダンは古くから楝と呼ばれ『枕草子』や『万葉集』といった文学作品の中にも登場する。

大野小学校では毎年学校全体で人々を勇気付けてくれるセンダンの木に感謝する「センダンの集い」を５月下旬に実施し、楽しいひと時を過ごしている。

31 中・寺尾遺跡

中区（小字は寺尾）の九州電力福岡制御所の南西に広がっていた遺跡で、乙金山から舌状に延びた低い丘陵の先端部に形成されていた。昭和 41(1966)・51(1976)・58(1983) 年に発掘調査が行われた。この遺跡は主に弥生時代前期～中期中頃の共同墓地であり、当時の人々の生活、とりわけ葬制、墓制を知る上で全国的に有名な遺跡である。調査では甕棺墓 53 基、土坑墓 89 基、石蓋土坑墓２基、石棺墓１基が見つかっている他、弥生時代の住居跡 39 軒、古墳時代の住居跡２軒なども検出した。

中・寺尾遺跡の中での墳墓の変遷を追ってみると、まず弥生時代前期には丘陵先端部に土坑墓が集中して形成され、その内の８基は小壺が副葬されていた。その後、前期末～中期初頭になると甕棺墓が丘陵稜線に沿った北斜面に形成されるようになる。中・寺尾遺跡から出土した甕棺には弥生時代前期の典型的なものが含まれる。

遺跡の一部は大池北公園の中に保存されている。

▲甕棺

▲副葬された小壺

32 森園遺跡

この遺跡は川久保３丁目にある九州電力の変電所構内と、その西側の斜面にあった遺跡である。変電所構内では主に弥生時代と古墳時代の住居跡が確認された。変電所の外側では、合計 59 基の土坑墓・甕棺墓・石棺墓などからなる弥生時代の墓地が見つかった。遺跡のあった土地は後の時代に大きく削られていることから、本来はもっと多くの墓があったと考えられる。また、弥生時代の墓地の周辺部では、幅約２m、長さ 35 m以上、深さ 60cm の大きな溝状の遺構が確認された。溝の底からは弥生時代中期後半の甕棺墓と同時期のたくさんの土器が出てきた。これらの土器は、当時日常的に使われていたものと異なり独特な形をしたものが多く、作り方も丁寧で、土器の表面が赤く塗られている。なかには土器の頸の部分を打ち欠いていたり、底に穴があけられていたり、一種の加工が加えられていたものも見られた。このことから、この溝から出てきたたくさんの土器は、弥生時代の祭りや儀式に使われていた土器ではないかと考えられる。

▲土器が見つかった溝

▲見つかった祭りの土器

33 中通遺跡群

この遺跡は宮野台にあった遺跡で、古墳 14 基、須恵器窯６基が見つかった。古墳はすべて横穴式石室で、６世紀後半から７世紀後半のものである。古墳の副葬品には須恵器・馬具・武具・耳環（イヤリング）・勾玉などが確認されている。その中でも耳環は全部で 22 個見つかっており、市内の古墳群の中でも群を抜いて多い。また玉類も勾玉・管玉など 211 個が見つかっている。勾玉の素材としては、硬玉製、碧玉製、瑪瑙製、水晶製、滑石製、ガラス製、管玉では碧玉製、ガラス製などがあり、小玉や丸玉などが大半を占める。これら玉類は現在の装身具としても通用するくらい大変きれいな仕上がりとなっている。

▲調査時の中通古墳

◀見つかった装身具

34 胴ノ元古墳

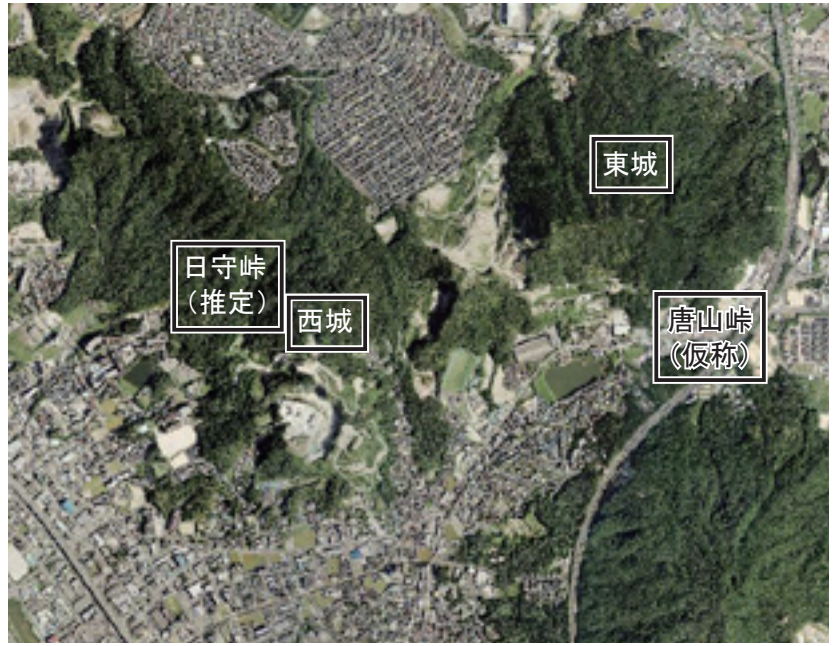
胴ノ元古墳公園内に保存されている古墳で、今から約 1400 年前の古墳時代後期に造られたものである。福岡地区水道企業団牛頸浄水場のすぐ東隣の丘陵上にあった古墳を、移転・復元したものである。本来は現在より 14 m以上も高い場所にあり、この古墳の上に立つと牛頸全域から春日市のほうまで見渡すことができた。

古墳は円形の盛土（墳丘）と、円弧を描く溝（周溝）を持った、直径 11 mの円墳である。石室は横穴式石室で死者を安置した玄室、玄室へと続く羨道もしっかりと残っていた。玄室内部は天井に向かって石が内側にせり出していく持送式と呼ばれる技法で、石が積み上げられている。1400 年の風雪を経てもびくともしない石組みの技法である。

35 唐山城跡

乙金区の北方、宇美町との境界、井野山頂上にある。『筑前国続風土記』に「乙金村にあり、山上に古城の址二所あり。東城は安河内備前と云者の居城なり。西城は神武修理亮居城也。両人ともに大友に属せり。神武は宇美の神職なりと云伝ふ。此城は立花城の遠見城なりと云。」とある。戦国時代（16 世紀）、太宰府から宇美に抜けるための交通の要衝であった唐山峠に築かれた唐山城は、岩屋城の向城として築かれた。大友氏の拠点として御笠郡の押さえの山城であった。

現在は土取りのため本来の姿が大きく損なわれている。



▲唐山城の配置

36 不動城跡

市の南部牛頸三丁目、通称「城の山」に残る戦国時代の山城で、住宅地開発のために部分的に削平されたが、主要部分は保存されて山頂に遺構が見られる。『筑前国続風土記』や牛頸区にある奈良原兵庫助高政の墓碑銘に記録がある。それによれば、秋月氏の旗下の奈良原刑部少輔が城を築いたこと、その子孫の奈良原兵庫助は豊臣秀吉の九州攻めの時に討ち死にしたことなどが記されている。このため、長らくこれが史実とされていたが、『筑紫家文書』などの近年の調査研究により、築城は奈良原氏によるが、秀吉の九州攻め当時はすでに秋月氏にかわって筑紫氏の端城になっていたことが判明した。

▲不動城跡全景

奈良原兵庫助高政の墓▶

37 猿田彦大神

市内に30基ある石碑である。猿田彦とは『古事記』や『日本書紀』に登場する神で「天八達之衢にいて、その鼻の長さ七咫、座高の高さ七尺余り。座高から推測すると身長は七尋あると思われる。また、口・尻が明るく光っており、眼は八咫鏡のようであり、照り輝いている様は赤いほおずきのようである。」と書かれている。

天津彦彦火瓊瓊杵尊が天孫降臨の際に、天八達之衢で天鈿女の「天照大神の御子がお通りになる道を立ちふさいでいるお前は誰だ」という問いに「天照大神の御子が今降臨されると伺った。それで、お迎え申し上げてお待ちしているのだ。私の名は猿田彦大神だ」と名乗っている。その後、瓊瓊杵尊を日向の高千穂まで案内したことから、道案内の神とされ三叉路などに祀られるようになった。また、江戸時代には庚申の申と猿田彦大神の猿を結びつけて、庚申の主尊となった。

▲上大利にある猿田彦

▲瓦田にある猿田彦

38 享保子丑餓死枯骨塔

大野城市乙金の髙原家の墓地にある享保子丑餓死枯骨塔は、享保17・18（1732・33）年に起こった大飢饉と疫病の際に餓死して無縁仏となった人々の骨を、当時里正であった髙原善一郎美徳が拾い集めて埋葬し、その100年後に当たる天保２（1831）年に曾孫である善蔵が建てた供養塔である。石塔には「享保十七年九州大いに饑え、本州最も甚し、田卒汗菜（稲も実らず野菜も枯れてしまう）となり、餓孚（飢え死にした人）道に相望む者数万人、翌年疫（伝染病）に罹りて死する者亦数万人、闔国（国中）の死者十万人に至るという・・・」と刻まれており、いかに大災害であったかをうかがうことができる。

太田南畝の『一語一言』には、その死者は筑前国の総人口367,800余人のうち、96,020人であったと記録されている。また、『日本災異紀』には「この年の秋の収穫は、前五ヵ年間の全国平均収穫高の一割五分しかなく、そのため全国で二百六十四万五千人の餓死者があった。」と記されている。山田の宝珠山慶伝寺境内にある「倶会一処塔」と刻まれた石塔も、このときの無縁仏を供養したものである。

39 春日原停留所・運動場道の碑

西鉄天神大牟田線の春日原駅は大正13（1924）年４月12日の九州鉄道（現西鉄天神大牟田線）福岡～久留米間の開通当初から開設された駅であった。当時、周辺はすべて松山と雑木林で西南側に「三ツ池」と呼ばれる三つの大きな池がある寂しい場所で人家はなく、筒井や雑餉隈・山田に住む人々は現在の秦病院（筒井１丁目）前から京塚墓地（現錦町公園）の横を通る幅1.5ｍほどの細い道を通らなければならなかった。そこで、雑餉隈在住の草壁氏が日田街道の下筒井黒男神社の横から春日原駅までの幅６ｍ、延長300ｍの道路敷地並びに工事費を寄付して「春日原停留所道」が大正13年５月に開通した。

この石碑は道の開通を記念して建てられたもので、正面に書かれた運動場とは、当時福岡市になかった運動公園を造れば市民・県民の憩いの場になり電車の利用客も確保できるという理由で大正13年に造られた陸上競技場兼ラグビー場を備えた総合運動公園のことである。ここではプロ野球の試合なども開催され、非常に賑わった。しかし、昭和25(1950)年に平和台球場が完成すると春日原運動場は不要となり、昭和30(1955)年に全面撤去され現在は住宅地となっている。

40 牛頸小学校跡の碑

明治５（1872）年８月３日の「学制」頒布後、明治 11（1878）年に牛頸下等小学校が開校したという記録が残っている。その後、明治 12（1879）年に「教育令」が公布され、「牛頸小学校」へと名称が改められ、その後の改革で数回にわたり改称が行われた。場所も当初平野神社の右側の地に創設されたが、生徒が増加して校地校舎が手狭になったため平野神社左側の地へ移転した。後に「小学校令」の一部改正により修業年限が４か年から６か年へと変更になり、校地校舎が手狭になったため現在の南コミュニティ西側の桜公園の地に移転した。

昭和 45(1970) 年以降、南ヶ丘、平野台、つつじヶ丘などの大型の新興住宅地の造成により急激に人口が増加し、牛頸小学校の児童が急増したために、それまでの校地校舎では児童を収容できなくなったので、昭和 46(1971) 年４月から現在の大野南小学校の地に鉄筋校舎を新築して移転し、校名も「大野南小学校」と改称した。

この碑は移転前の小学校を記念して昭和 46 年３月に建てられた。牛頸小学校と書かれた木製の看板は平野小学校が保管している。

41 宮添井堰の碑

大野城市に残る「ひんどの人柱と火の玉」の伝説の記念碑で、宮添井堰が自動巻上げ式へと造り変わる平成 15(2003) 年１月に建てられた。

宮添井堰の伝説は次のとおりである。「山田村や乙金、金隈村へ水を引くための宮添井堰は、御笠川が氾濫するたびに流されていました。修理の話をしているときに人柱をたてて井堰を築くと壊れないという話が持ち上がりましたが、生きたまま井堰の下に埋め込まれるのですから、自分から進んで人柱になろうとする者はおりません。そこで庄屋の甚兵衛さんは最後の手段として翌日の公役のときに、横縞の襟の着物を着ている者を人柱にしようと決めました。翌朝作業を始めると、横縞の襟の着物を着た人がいたので、村人たちはその人を井堰の下に埋めました。作業が終わって村人たちが集まると、庄屋の甚兵衛さんの姿が見当たりません。甚兵衛さんは自ら犠牲になり井堰の下に埋め込まれ人柱になったのでした。こうして完成した宮添井堰は、その後の大洪水にも壊れずに田畑をうるおし、山田村は豊かな村になったそうです。その後毎晩のように御笠川の堤防の上に火の玉が出るようになりました。村人は庄屋の甚兵衛さんが火の玉となって見守ってくれていると考え、火の玉に向かって手を合わせて、感謝したということです。」

42 天狗の鞍掛けの松の碑

牛頸に残る伝説「天狗の鞍掛けの松」の記念碑である。平野小学校による発案で平成13(2001)年度に当時の位置より少し西よりの現在地に記念碑を建て、４代目となる松を植えた。その伝説は次のとおりである。

「上大利から牛頸までの２kmほどの間は、人家が一軒もなく、両側は山に挟まれて、さびしい一本の細い道が続いているだけです。牛頸村の入口に一本の松の大木が立っていました。梢のほうは切られたように平たくなっていて、ちょうど馬の背中のような格好をしていて、そこに背中に大きな羽根の生えた、ギョロリとした大きな目玉を持ったいたずら好きで非常にお酒の好きな天狗さんが住んでいました。牛頸村の人にはとてもやさしい天狗さんでしたが、よその村の人が近づくといたずらをして困らせていました。ある日、稲の出来具合を調べるために馬に乗った武士が牛頸村にやってくると、天狗さんは八ツ手の団扇でサッとひとあおぎし、その武士を吹き飛ばし、馬の鞍を取り上げて自分が住んでいる松の木に掛けました。そこからこの松を「天狗の鞍掛けの松」と呼ぶようになりました。今でも牛頸の古老たちは、天狗さんはいるのだと信じているそうです。」

43 平野神社

創建年代は不詳であるが、伝承では正暦年中（990～994年）と伝えられており、市内で最も古い神社である。篠原家所蔵の『牛頸平野宮縁起』（安政４(1857)年）には、山城国（現在の京都）葛野郡平野社から勧請したものという記録がある。祭神には今木神（渡来人の神）、久度社（窯の神）、古開社（使用済みの窯の神）、比売神（桓武天皇の生母高野新笠）が祀られている。

平野神社では現在でも10月に３日間にわたって宮座が執り行われている。お注連打ち、餅つき、献饌の儀、撤饌の儀、当渡しが12人の宮座構成員によって行われる。宮座の中でも餅つきが最も神聖な儀式で、椎の木の上下を削った杵を用い、12人の男性が榊の葉を口にくわえ餅をつく。

鳥居の横の楠には「天狗の鞍掛けの松」に登場する天狗が長い鼻を伸ばしてもたせかけ、その上に雀やカラスが止まって遊んでいたという伝説が残っている。

▲平野神社

▲宮座の時に着用するはっぴと杵

44 新川跡

現在の新川緑地公園（瓦田石ヶ町から下筒井の錦町１丁目信号の前まで、旧太宰府往還の西側に沿って１km に及ぶ）は江戸時代の運河の跡である。

寛文４（1664）年黒田藩主光之公の時代、上座、下座２郡（現朝倉郡）の年貢米を船に積んで福岡城下に運ぶために、千歳川（今の筑後川）の水を引き、夜須、御笠を経て宰府川に合わせ、比恵川に通す計画で幕府の許可も得たものの、途中障害も多く水路も長いため、工事が困難ということで中止となった。しかし、この運河が完成すれば利便が多いという理由から、寛延２（1749）年藩主継高公の時に至って、御笠郡二日市村（現筑紫野市）を起点として博多へいたる運河を開くこととして再度幕府の許可を得た。寛延２年工事に着工し寛延３（1750）年に完成した。宝暦４（1754）年頃より運航を開始したと思われるが、実際に開始してみると、運河に入る水が少なく、そのため舟底がつかえるところが多く、結局舟行困難となり数年にして廃止となった。

運河は埋め戻してもとの田畑に戻したのに、筒井のあたりだけを後世に残したのは、後年再びこの種の計画についての議論が持ち上がることを防止する意味があったとされる。

▲遊歩道となった新川跡

45 大野村消防組第二部格納庫

大正末期に白木原に建てられた赤煉瓦造りの第二部消防ポンプ格納庫が、平成 10（1998）年７月に街路拡張に伴って瓦田へ移設された。市内に残る貴重な近代建築ということで、市民の手によって解体され、当時の赤煉瓦を一部使用して建てられた。

現在の大野城市消防団第二分団の前身は、大野村消防組第二部といい、明治 26（1893）年４月に制定された「大野村消防組規約」によると、大野村を５区にわけ、瓦田・白木原を管轄するのが第二部であった。当時は 16 歳以上 45 歳以下の男性は必ず組員にならなければならなかった。

この格納庫の中には、消防活動の功績を讃えた金馬簾授与の表彰状が掲げられている。通常纏には竿頭に種々の飾りや部の名称番号等を書き、その下に馬簾という革などを細長く裁ったものを十数本垂らすが、金馬簾は消防組の人的また機材整備および消防活動の優秀な功労に対して一条与えられるもので、纏に飾ることを許された組の名誉を讃えたものであった。また、大池の消防器具格納庫にも金馬簾贈与の表彰状が掲げられており、当時の大野村消防組がいかに優秀であったかがわかる。

▲移設後の格納庫

大野城市文化財 MAP

市民ミュージアム

大野城心のふるさと館

Onojo Cocoro-no-furusato-kan City Museum

6 13 14 15 16 17 21 23 27

展示を行っていない場合もございます。 展示情報については館に直接お問い合わせください。

〒816-0934 福岡県大野城市曙町3丁目8-3
TEL 092-558-5000／FAX 092-558-2207
http://www.onojo-occm.jp